を明治十四年と推定）は興味深い。軍医監と文部省雇いを兼務していた橋本綱常の「検閲使」任命人事に対して、謙斎が苦情を申し入れたので、松本は強硬な談判状を送りつけた。注目されるのは松本の陸軍至上主義と綱常愛顧。反面、大学教育優先をいう謙斎の姿勢。松本は謙斎のいう「昨年御口約」に反発したのである。これが本書状。

『蘭疇自伝』（明治三五年刊）で松本は、明治十年帰国直後の綱常処遇に反発する西南戦争従軍医師団を叱責する際、前年帰国の謙斎の学力と地位に言及。綱常優位を断じ、内閣の謙斎重用は誤りと難詰した。側杖を喰ったのは謙斎。以後、右書は両者比較論の起因を提供したことになろうか。

また、松本順のバイヤス眼を通さない、綱常と謙斎との交流、かつ、謙斎の面倒見の良さの本性が窺える橋本綱常書状（明治十年一月五日付、七五頁）も注目される。

史料を読むとは「鐘は撞木の当たりやう」であり、研究者の覚悟が求められよう。よって本書自体も引用や傍証の根拠たりうる史料集であろう。

（岩崎　鐵志）

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二―七、二〇〇六年二月、A五版、三二〇頁、本体六八〇〇円〕

寺畑　喜朔　編

『絵葉書で辿る日本近代医学史』

本書は、著者が所蔵している絵葉書約一三〇〇枚中、約八〇〇枚をテーマ別に収載した著作で、『絵葉書で辿る日本近代医学史』という大変魅力的なテーマが、眼を引く。言葉で説明するよりも、視覚に訴えることは、相手に同意を得やすいことであり、事実、色彩学では感覚うち八〇％以上を視覚で占められるという見解がある程である。しかも、絵葉書という異なった理由で製作された媒体を、近代医学史という広域なテーマでまとめようとした著者の苦労は、大変なものであったろうと想像される。コレクションというものは、何かひとつ欠けても成立しないことは衆知のことであり、その苦渋は察っして余りあるものがある。

内容は、日本における中国医学の発達、西洋医学とくに和蘭医学の導入と開化、医育機関及び病院の勃興と推移（1）～（3）、日本赤十字社と救護活動、薬とその周辺・衛生思想の啓蒙、日本医学会と日本医師会明治の西洋館・保存されている顕微鏡、「医」とはの九章に分かれ、章の前段に解説と絵葉書一枚毎にくわしい説明・分析が提示されている。絵葉書のほとんどは一九四〇年以前であり、奥沢康正先生ら数名の先生方の史料提供・協力があったことが記されており、すべてカラー版で、限定二五〇部の出版とのことである。ち

なみに紹介者の所蔵している本書の番号は、二一六番である。

紹介者は、十三年程、歯学部において、医学史、歯科医学史の講義を担当しているが、年を追うごとに医史学に対する興味を失う学生が多くなってきているようである。しかし、学生から、昔の白衣、手袋、帽子、あるいは医療器具がどうであったか、個人的に質問を受けるケースも多く、このような時、実際の史料を見ると興味を示す学生がまだいることも事実である。しかし、常に豊富な史料が手元にあるとは限らない。本書では、「不許複製などと堅苦しいことは全く考えていません。気軽に斯界のために活用していただければ、著者は望外の喜びといたします。」とはじめにことわりがきがあり、本書のような豊富なコレクションを、パワーポイント、スライド、ＯＨＰで学生に提示すれば、教育効果があがると確信する。このような、ビジュアルな史料を提供いただいた著者に、医史学講義の担当者として、御礼申し上げる。

本書の特徴として、医育機関及び病院の勃興と推移、日本赤十字社と救護活動に多くのページ数を裂いていることである。これは、絵葉書が記念的な性格をもっている以上、その建築物に対する出版が多くなるのは必然であるが、講義・実習風景あるいは診療風景の絵葉書まであり、個人情報保護法のうるさい現代からみると隔世の感がある。また各種建築物は、装飾性の強い建築から、合理的な設計へと移り変わる様子がうかがえ、建築史の史料としても、見るべきものがあると考える。このような、各医育機関の絵葉書は、その卒業生や関係者には、大いなる郷愁をさそうものであろうが、著者は医史学者として冷静な解説を加えていることも特徴的である。

多用な内容をもった本書であるが、最後には、「医とは」という章で、小川鼎三先生の言葉を引用して、「医学は医を学問的に考えた時かおこる」とし、緒形洪庵、ルイ・パストゥール、ルドルフ・ウィルヒョウらの絵葉書を取り挙げ、医の倫理に言及してしめくくっている。是非、廉価な普及版を作って、配布していただけないかと願うしだいである。

本書は、二〇〇六年の矢数医史学賞を受賞した。御祝いを申し上げたい。

（西巻　明彦）

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二―七、電話〇七五―七五一―一七八一、平成十六年十二月十日、二四五頁、本体二二〇〇円〕

鈴木　厚　著

「世界を感動させた日本の医師」　信念を貫いた愛と勇気の記録

本書は現在の日本の医療を問い続けている鈴木厚氏が、一世代または二世代前の四人の日本人医師をとりあげて、その